Y6-04

東日本大震災における日本赤十字放射線技師会の取り組み

名古屋第二赤十字病院　医療技術部 放射線科[1)]、
日本赤十字社　和歌山医療センター[2)]、
神戸赤十字病院[3)]、
唐津赤十字病院[4)]、
前橋赤十字病院[5)]、
松江赤十字病院[6)]
○駒井（こまい）　一洋（かずひろ）[1)]、口井　信孝[2)]、中田　正明[3)]、
坂井征一郎[4)]、久保田利夫[5)]、益井　謙[6)]

日本赤十字放射線技師会では、災害医療においては揺るぎない存在である日本赤十字社ブランドを診療放射線技師の世界にも確立し、放射線技師関連学会の災害医療分野において、日赤の技師がリーダーシップを発揮することを目標に、今年度災害医療分科会を設立した。その準備中に東日本大震災が発生、当分科会の世話人3人が初期の救護活動に従事すると同時に、日本赤十字放射線技師会では放射線機器メーカに機器貸与の要請を行い、その結果4社の協力を得てポータブル型X線撮影装置5台、ポータブル型超音波診断装置5台、CRシステム6セット、高精細画像モニタ20台を確保。それぞれ要望のあった施設への貸与を行った。また本社に寄贈されたポータブルX線診断システムの活用に関するマネジメントを行い、5月30日現在一仮設救護所に上記システムの導入を進めている。診療放射線技師が常駐していない仮設救護所などの場合、そのニーズと法的制限に照らし合わせて放射線機器及び必要物品を設置せねばならず、それには診療放射線技師の関与が必要である。現在仮設救護所建設のキーパーソンである医師と、当分科会の世話人が連絡を密に取り合って放射線機器の設置を進めているところである。

日本赤十字放射線技師会及び災害医療分科会の一連の活動、その課題と可能性について報告する。

Y6-05

研修医からみた災害医療支援

名古屋第二赤十字病院　研修医
○稲田（いなだ）　麻衣（まい）

発災当日のDMATや救護班の出動を見て、自分も役に立ちたいと思い派遣を申し出た。研修医の派遣が許可され、3月23～27日まで宮城県石巻市で救護活動を行った。活動は避難所の巡回診療と救急外来診療支援であった。巡回診療は、当時未確認の小さな避難所の状況調査から始まった。そこはインフラの途絶えた公民館の分館で、80人が身を寄せていた。被害が浸水、半壊であったその周辺地域では、自宅に残っている多くの被災者の医療ニーズを掘り起こすため、ローラー作戦を展開した。活動を始めた頃、大量のがれきに圧倒され自分の無力さを感じた。また、地域の医療施設との連携など難しい課題があると聞き、「自分にできることがあるのか？」と自信を喪失していた。しかし、巡回診療で被災者を診たとき、期待されている医療ニーズを実感できた。決して重症ではなかったが、認識すらされていなかった医療ニーズを自ら掘り起こして応えるという救護班の役割が自分の中で明確になってきた。被災者の安堵の表情をみると、自分たちの活動は被災者の日常生活の一部を取り戻すことなのだとやりがいを感じた。初めての研修病院外での診療であった。被災者の家に入った瞬間に家族の被災状況を読み取り、その場にあった対応をする能力が求められたが、このような経験は今までなかった。また、初めての災害医療の現場でもあった。行方不明の近親者や被災時の状況を雑談の中で何気なく話す被災者に戸惑った。悲しさを押し殺している被災者にどのような言葉をかけたらよいのか最後までわからず、今も私の課題として残っている。私たち研修医は、普段初期診療にあたることが多い。まだ医師としても、人としても未熟だが、普段の診療を活かし、被災者が生活の一部を取り戻すことに協力できることを経験した。この経験は、災害救護や国際救援に関りたいという夢をより強固なものとした。